
シャルル=ヴァランタン・アルカンの《エスキス》再考

－ 神に捧げられた書、そして音楽理論の書として読み解く －

村井幸輝郎（京都大学）

19世紀パリのユダヤ人作曲家シャルル=ヴァランタン・アルカン(1813-1888)は、タルムードの印刷業を営む祖父を持ち、幼少をユダヤ人居住区で過ごし、1850年ごろにはシナゴグのオルガン奏者も務めた。芸術音楽にユダヤの旋律や日々の祈りを持ち込んだ世界初の例とも言われる作品31《25の前奏曲》(1844)は、第1-24曲で全調巡回しながらユダヤ的標題を扱い、その総括として終曲に〈祈り〉を提示しており、アルカンが自身のユダヤ性を作品の中で堂々と告白したことを示す格好の作例となる。しかし、《25の前奏曲》と瓜二つ、つまり全調巡回後に終曲〈神を讃えて(Laus Deo)〉を配する作品63《エスキス》(1861)においては、全調巡回部にはユダヤ的な要素は一見しただけでは見当たらない。

《25の前奏曲》で全調巡回部のユダヤ的要素が終曲の〈祈り〉に収斂するというプログラムを提示できたアルカンが、聖書研究に没頭したとも噂されている時期に残した類似の作品集《エスキス》では全調巡回部にユダヤ的要素を持ち出さずに終曲に唐突に〈神を讃えて〉を配置している、というのはいささか奇妙ではなかろうか。発表者は、《エスキス》の調性配列が5度圏の円環上にダビデの星の図像を鳥瞰的に描き出すことを発見し、それが偶然とは考えにくいことを、統計学的手法及び15-20世紀初頭にかけて作曲された同様の構造を持つ約50の作品集の網羅的調査によって明らかにした。「Laus Deo」という結びの文言には直接的にはハイドンの影響が認められ、さらにその文言が音楽理論と宗教性が結合した図像を提示した後に配置されている《エスキス》の構造は、17世紀前後の音楽理論書と酷似していることを、中世以降の約800冊の音楽理論書の全ページ調査を踏まえ、発表者は新たに見出した。

また、1847-61年に刊行された音楽雑誌 *Revue et Gazette musicale de Paris* と *Neue Zeitschrift für Musik* の記事と広告の調査から、《25の前奏曲》は世俗一般にも理論家にもアルカンのユダヤ性の告白として好意的には受容されなかったことが分かった。出版状況も芳しくなく、誤った曲順で印刷された挙句に、別作品集への添え物扱いに終わっていたのである。その状況を背景として考え、アルカンは《エスキス》に託したダビデの星を世俗一般ではなく鳥瞰的視点から神に捧げ、そして曲集全体を理論家による解釈を待たずともそれ自体で理論書的人格を持つものにした、という結論に達した。《エスキス》の出版以来150年以上にわたって見過ごされてきた側面に光を当てる本知見は、アルカンの隠遁中の心情を推察して作風の変化を解明する一助となるにとどまらず、芸術音楽におけるユダヤ性の表出と隠蔽という文脈に、極めて示唆に富む例を与えるものである。